

ASEを導入した体育授業が女子看護学生の友達づきあいに及ぼす効果

岡村泰斗（筑波大学大学院）

1. 研究の背景

ASE (Action Socialization Experience) とは、ひとつの小集団が1人では解決できない精神的、身体的課題に対しメンバー1人1人の能力を出し合い、協力しながらその課題を解決する活動の総称であり、別名イニシアティブゲームと呼ばれている。もともとは自然環境の中で行われる冒険教育を、学校現場や都市の中で人工的な専用設備を利用することによって行うためにアメリカで開発されたものであり、近年我が国の学校教育現場でも注目を集めている。宮城県では県の高校教育課、義務教育課、生涯学習課、健康教育課、研修センターなど学校教育を支える機関が共同で教員を対象とした講習会を平成12年度より開始した。8月までに17回の講習会が行われ、700名以上の教員が参加したと報告されている（難波、2000）。そこで、本研究は、ASEを導入した体育授業が、新入学直後の女子看護学生の友達づきあいに及ぼす効果を検証することを目的とした。

2. 研究方法

神奈川県Y看護専門学校1年生49名を実験群とした。実験群は24名と25名の2クラスからなり、クラス別に授業を行った。第1、2回目の体育授業を用いアイスブレイキングゲーム、イニシアティブゲーム、ふりかえりをおこなった。イニシアティブゲームでは、8もしくは9人の3グループに対し、体育教員である筆者1名が指導にあたった。一方、統制群は茨城県T短期大学部看護学科1年生55名であった。実験期間中、統制群の半分の学生はハンドボール、残りの半分はソフトボールからなる一般的な保健体育授業を行った。

本研究では、女子看護学生の友達づきあいを測定するために、長沼ら（1998）が青年期の友人関係を調査するために作成した質問紙を採用した。友達づきあいのタイプを示す16因子のうち、「女子が男子よりも顕著に見られる因子」及び、「大学生において女子が男子よりも顕著に見られる因子」を選出した結果、以下の10因子が該当した。それらは、「嫌われないように気を使っている」、「ありのままの自分を出している」、「悩みを相談する」、「相手を信じている」、「自己理解が深まる」、「好かれたいと願っている」、「傷ついても本音でつき合う」、「常に決まった相手と行動する」、「励まし合う」、「相手に尽くす」であった。各々の因子より因子負荷量の高い順に、かつ項目内容の隔たりにないように3項目選出した。その結果、合計30項目10因子からなる「友達づきあい検査」を作成した。また、学級における友達づきあいの変容を知るために、学校モラル研究会（1984）によって開発された学級適応性診断検査（School Morale Test: SMT）に含まれる6因子のうちの「級友との関係」と、根本（1982）によって開発された「学級雰囲気測定尺度」を実施した。

実験群に対し、第1回目の体育授業（4月12日）開始時と第2回目の体育授業終了後（5月13日）、統制群に対しオリエンテーションを除く第1回目の体育授業開始前（4月21日）と3回目の体育授業終了後（5月20日）にそれぞれPRE-TEST、POST-TESTとして調査を行った。また、補足資料として、体育授業中の参加者の体験を抽出するために、実験群の2回の体育授業終了時に「ふりかえりカード」を行った。「その時わたしはこう思った」と題し、体育授業中最も印象に残った「体験」と各々の体験に対する「体験の意味」について、自由記述により抽出を行った。

3. 結果

分散分析の結果（表-1）、実験群の友達づきあいのうち「傷ついても本音でつき合おうとする」、「励まし合う」は、POST-TESTで有意に低下し、「決まった仲間たちと行動する」は、POST-TESTに有意に向上した。さらに「励

まし合う」は統制群と比較し有意に低下していることが明らかとなった。松永（1999）はキャンプにおいて「決まった仲間たちと行動する」が低下することは、各々が独立した関係になったことを示す結果であると分析している。そのため実験群の変容は、近年の青少年の友達つきあいに代表される「表面群」、「群れ関係群」を示すものであった。これらは深い関わりをつくらない友達つきあいと関連しており、ASE の成果が親密な友達つきあいに対する態度に十分な影響を及ぼさなかったと考えられる。

続いて、実験群の「級友の関係」と「学級雰囲気」は POST-TEST で有意に向上したが、統制群との間に有意差は認められなかった。学級における友人関係や学級の雰囲気は、入学直後の学級形成の過程で肯定的に変容すると考えられる。すなわち、ASEを導入した2回の体育授業によって学級における友達つきあいが肯定的に変容する程度は、行わなかった学級と比較し同程度であった。

表-1 友達つきあい検査・学級適応性検査・学級雰囲気測定尺度の平均点・標準偏差及び分散分析結果

	実験群					統制群					実験群×統制群
	PRE-TEST		POST-TEST		分散分析 F	PRE-TEST		POST-TEST		分散分析 F	共分散分析 F
	M	SD	M	SD		M	SD	M	SD		
友達つきあい検査											
傷ついても本音でつき合う	11.90	2.22	11.22	2.36	5.06 *	11.47	2.67	11.58	2.47	0.12 n.s.	2.42 n.s.
常に決まった相手と行動する	10.47	2.60	11.43	2.35	8.59 *	11.38	2.48	11.47	2.77	0.07 n.s.	1.06 n.s.
励まし合う	13.14	1.72	12.73	1.59	4.67 *	12.25	1.75	12.73	1.52	5.94 *	4.49 *
学級適応性検査											
級友との関係	8.06	3.00	9.39	3.18	9.06 ***	6.42	3.48	8.56	3.18	31.01 ***	0.04 n.s.
学級雰囲気測定尺度											
学級雰囲気	67.18	9.26	70.67	9.38	13.54 ***	60.53	7.82	64.49	9.34	19.52 ***	0.41 n.s.

* p<.05 ***p<.001

ふりかえりカードより印象に残った体験を分類した結果、最も困難なイニシアティブゲームでの体験をあげるものが最も多かった（24件 48.9%）。また、アイスブレイキングゲームに比べイニシアティブゲームをあげる頻度が高かった。これらのことから、問題解決の過程で協力や助け合いをより必要とする活動が印象に残ったと考えられる。つづいて体験の意味を分類した結果、「協力・チームワーク」（23件 46.9%）が最も多く、次いで課題を解決したときの「達成感」（20件、40.8%）と活動を通しての「楽しさ」（20件、40.8%）であった。

4.まとめ

新学期にASEを導入した体育授業を2回に渡り行ったところ、女子看護学生の学級における友達つきあいは深まり、学級の雰囲気は高まったが、一般的な学校生活における変容と同程度のものであった。また、友達つきあいに対する態度に対し、十分な影響を与えることができなかった。しかしながらASEを導入した体育授業は、看護学生にとって「楽しく」、「達成感」を得るものであり、級友との「協力」の必要性に気づく体験であったことが明らかになった。これらの体験は学級における友人関係や友達とのつきあい方に関する新たな気づきではあったが、その気づきが態度に一般化され、一般的な学校生活に比べより高い効果の得られるものではなかった。

引用文献

- 学校モラル研究会(1984)中学校用高等学校用 SMT 手引結果の見方と利用、日本文化科学社、東京
- 松永太郎、飯田稔、井村仁、関智子、落合良行(1999) キャンプ実習体験が女子高校生の友達つきあいに及ぼす影響、野外教育研究、2(2):21-28
- 長沼恭子、落合良行(1998)同性の友達とのつきあい方からみた青年期の友人関係、青年心理学研究、10:35-47
- 難波克己(2000)アドベンチャー教育最前線、青少年問題、47(8):34-39
- 根本橋夫(1983)学級集団の構造と学級雰囲気およびモラルとの関係、教育心理学研究、31(3): 26-34